

# 課題名：周南地域における都市との交流による農山村の活性化

～女性が主役の交流を柱とした渋川のむらづくり活動～

周南農林事務所農業部

安良田 恵美子

## <活動事例の要旨>

山口県周南市渋川は、市北部の中山間地域に位置し、高齢化の進展等による集落機能の低下が懸念される地域である。平成 15 年に地区の女性が中心となって、コミュニティ組織「渋川をよくする会」を設立し、これまで、環境保全活動、伝統文化の掘り起こし、都市との交流など、地区住民主体のむらづくり活動を展開してきた。

しかしながら、高齢化の進展、後継ぎの他出など、渋川の生産・生活を支える担い手が減少する中、地区住民のむらづくり活動に対する機運が減衰することが懸念された。

このため、「渋川をよくする会」を中心としたむらづくり活動の充実・強化を図るため、都市との交流を柱にした「ヒト・モノ・カネ」の循環のしくみづくりを目指し、地域資源を活かした交流の推進、むらづくり活動への他出後継ぎの参画を支援した。

また、むらづくり活動実践地区の連携ネットワークの構築、関係機関の支援強化を図るため、渋川と同様の目的でむらづくり活動を実践している大潮、中須北、小畑地区の代表者や市などで構成する「むらづくり活動検討会」の設置を誘導した。

この結果、渋川地区住民の中に、新たなビジョンによるむらづくり活動の機運が芽生え、交流活動の定着、休校中の渋川小学校のむらづくり活動拠点としての活用、「しぶかわ清流営農組合」の法人化など、生産・生活一体型のむらづくり活動が本格的に動き出した。

また、むらづくり活動検討会を通じて、むらづくり活動実践地区の連携が強化されるとともに、市への情報発信、交渉力が強化されるなど「地域と行政」の結びつきが強くなった。

## 1 活動のねらい・目標

### (1) ねらい・目標

周南地域は、生産・生活条件が不利な典型的中山間地域が全体の 8 割を占めるが、近接する都市部へ若い世代が流出し、生産・生活の担い手の高齢化が深刻で、集落機能の低下も著しい。

このような集落ごとの機能低下が進む中山間においては、複数集落の連携による新しいむらづくり組織の育成を通じ、住民の内発力を高め、新しい地域活力を呼び起こすことで、管内の生産・生活基盤である農村の維持・活性化を図っていくことが緊急かつ重要な課題であった。

この課題解決のために、渋川地区のむらづくり活動が交流を柱としたコミュニティ・ビジネスへ発展するよう、以下のように普及活動を展開した。

### (2) 対象（地区の概要）

渋川地区は、3 集落に 67 戸（うち農家 43 戸）、140 人が暮らし、60 歳以上が 6 割を超える過疎・高齢化が進展した地区である。

また、過疎化の進展などによるムラの崩壊に危機感を抱いた女性有志が立ち上がり、他の地区に先駆けて、生活改善運動の一環として長年にわたりむらづくり活動に取り組んできた地区である。

平成 15 年 6 月に渋川生活改善実行グループのリーダーの働きかけにより、全戸参加により設立した「渋川をよくする会」を主な対象とした。

## 2 活動の内容

### (1) 具体的な指導・支援

#### ア 「渋川ふれあい交流」開催支援

##### ①交流相手探し

交流をレクリエーションとしてだけではなく、むらづくりのパートナーとして協力が得られるよう、交流相手探しを行い、県の協働活動バンクに登録している地元企業を候補に選定し、渋川地区に紹介した。

##### ②交流メニューづくり

『地域外の人々の視点や助言を得ながら、地区の人たちが地区にある当たり前なもの（地域資源）を調査し、光を当てることで、ムラへの自信と誇りを取り戻す』という地元学の本質になり、交流参加者と地区住民と一緒に地域資源を探索する「あるものさがし」を中心に、女性や高齢者のチェヤワザ、遊休農地、休校中の小学校、河川プール、御大師様など地区の多様な資源を活かした交流となるようメニューづくりを支援した。



あるものさがしの様子

#### 「渋川ふれあい交流」の開催状況

	平成20年度開催内容	参加者数	平成21年度の開催内容	参加者数
第1回	遊休農地の復元とサツマイモの定植	4家族、10人	ジャガイモ、サトイモ、ニンジン、ダイコンの定植・播種、地元のイベントに参加	6家族、20人
第2回	草取り、サツマイモのつる返し 小学校周辺を散策してあるものさがし、お大師様の保全活動、河川プールで川遊び	5家族、19人	ジャガイモ等の収穫、サツマイモの定植、第3回の内容検討	5家族、18人
第3回	草取り 渋川の家庭料理を学ぶふれあい料理講座	5家族、19人	夏野菜の収穫、サツマイモの管理、水辺のあるものさがし、河川プールで川遊び、長野山緑地公園でキャンプ、夜空の観察会、長野山散策（1泊2日）	5家族、18人
第4回	サツマイモの収穫、焼きイモといもがゆづくり、収穫祭への参加	5家族、18人	サツマイモの収穫、焼きイモといもがゆづくり、収穫祭への参加	(計画中)

##### ③交流の運営体制づくり

交流の運営母体を「渋川をよくする会」とし、「しぶかわ清流営農組合」が会を支援する体制となるよう地区を誘導した。

また、協働活動の定着を目指し、交流企画の検討、交流会の運営、交流後の反省会に地区住民、都市の交流参加者双方が参画する仕組みとした。

#### イ 新たなむらづくりビジョン及び行動計画づくりに向け、地区の再点検を実施！

##### ① 活動の足跡を「しぶかわ夢の実現マップ」に！

「渋川をよくする会」発足後5年間のむらづくり活動を住民自らが検証・評価するため、ワークショップを開催し、KJ法を用いて、実現したこと、活動してよかったこと等を整理し、しぶかわ夢の実現マップとして取りまとめ全戸に配布した。

##### ② 落点検により地区を再発見・再認識！

渋川地区の現状を把握するため、会員とともに年齢構成、家族構成、後継ぎの状況等について点検した。



「しぶかわ夢の実現マップ」

また、地区の変化の状況に対する住民の認識を深めるため、5年前に実施した点検結果と併せて、住民に紹介した。

## ウ 他出後継ぎのむらづくり活動への参画促進

### ① 「はがき作戦」でムラからの情報発信！

他出後継ぎを渋川に呼び戻すためには、自分の生まれ育った渋川の良さを再認識してもらうことが必要との観点から、「渋川をよくする会」の会員が分担し、県内外の他出後継ぎに収穫祭の開催、準備への参加を呼びかけるはがきを郵送した。

### ② 親世代から後継ぎへのメッセージを発信！

親子間の話し合いのパイプづくりとして、「渋川をよくする会」と当農林事務所との連名により、他出後継ぎの帰農に関する意向調査を実施した。

また、親子それぞれの考え方を共有するため、イエの農業の継承に関する内容を盛り込んだ家族経営協定の締結を推進した。

## エ 渋川地区のビジョン・行動計画づくり

「渋川をよくする会」が全戸参加の集会を開催し、集落点検結果の報告後、新たなビジョン作成のため、ワークショップを行った。

ワークショップでは、KJ法でこれからどのような地域にしたいか、どんな活動に取り組みたいかのアイデアや意見を出し合い、これらを整理して、新たなビジョン・行動計画として取りまとめた。



ワークショップの様子

## オ 「むらづくり活動検討会」の開催

周南市のむらづくり活動実践地区代表者、市に対し、むらづくり活動に関する情報の共有、ノウハウの習得、地域間連携、関係機関の支援のあり方などを話し合う「むらづくり活動検討会」の開催を提案し、趣旨に賛同を得て、渋川、大潮、中須北、小畑地区のコミュニティ組織の代表者、市、有識者の参加により、各地区持ち回りにより検討会を開催した。

「むらづくり活動検討会」の開催状況

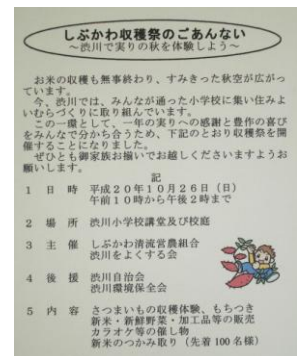
開催時期	検討内容	開催場所
平成20年 8月27日	・設置趣旨の説明 ・検討会の活動方向等に関する意見交換	大田原自然の家
平成21年 2月12日	・ワークショップ「『おばた金明水と棚田の会』の活動の現状と今後の活動方向」 ・H21年度検討会開催計画の協議	小畑公民館
平成21年 5月27日	・講演「都市住民の力を活かしたむらづくり活動におけるコミュニティ組織の役割について」 講師：農村工学研究所研究員 坂本誠氏 ・むらづくり活動検討会のスケジュール ・「おもしろ体験農園」の取組を視察	大潮小学校
平成21年 8月27日	・視察研修「むらのコミュニティを基盤とした集落営農やコミュニティ・ビジネスの展開について」（ふき活性化協議会を視察）	大分県豊後高田市

## (2) 普及活動の経過

平成14年に鹿野町（当時）が開催した「地域づくりセミナー」を契機に、渋川地区住民のむらづくり活動意識が高まった。

このため、本格的なむらづくり活動に発展するよう、平成15年度に「農山村のひと・きらめき発信事業」を導入し、むらづくりセミナーの開催などにより、機運醸成を図った結果、平成15年6月に「渋川をよくする会」が設立された。

また、「むらづくり活動には、生産体制の整備が必要！」との会の女性の声を受けて、営農組織の話し合いの再開を促すため、中山間地域集落協定役員に対し、渋川営農推進



収穫祭案内はがき

会議の設置を提案するとともに、組織化の検討支援を行った結果、平成 19 年 3 月に地区の全農家が参加する「しぶかわ清流営農組合」が設立された。

取組年度 取組部内体制		H19 一般活動	H20 プロジェクト	H21 プロジェクト
対象の変化		今後の活動方向が不明確 女性が中心のむらづくり 一過性の交流イベント	後継者確保の重要性を再確認 男性が積極的にむらづくり参加 交流相手に信頼感	後継者確保を活動の柱に 営農組合の法人化に意欲向上 交流相手と企画・運営
取 組 内 容	「渋川のふれあい交流」 開催支援	交流に取り組む目的を話し 合い	交流相手探し 交流メニューづくり 交流の運営体制づくり	
	地区の再点検	活動の足跡を点検し「しぶ かわ夢の実現マップ」作成	集落点検活動	
	他出後継ぎのむらづく り活動への参画促進	家族経営協定の推進	「はがき作戦」で収穫祭に案内	帰郷・帰農に関する意向調査
	渋川地区ビジョン・行動 計画づくり		ビジョン作成のためのワークシ ョップ開催	渋川地区ビジョン・行動計画の 作成
	むらづくり活動の支援 体制づくり		むらづくり活動検討会の開催	

### (3) 普及指導センター内における活動体制

平成 20～22 年度を活動期間とするプロジェクト課題「周南地域における都市との交流による農山村の活性化」を設定し、5 人のチーム員により活動を行った。

また、しぶかわ清流営農組合の法人化支援を内容とした経営体育成プロジェクトチームとも、適宜連携し地区の指導に当たった。

### (4) 関係機関との連携

むらづくり活動は、地域の主体的な取組が基本であるが、活動の進展状況等に応じて、関係機関が適時・適切に指導・助言することが必要である。

このため、プロジェクト策定に市関係部局担当者が参加し、計画づくりを行うとともに、実践段階においては役割分担を明確にして活動を展開した。

特に、本課題は中山間地域振興対策の内容を含んでいることから、市関係部局として農業主務課のほか地域振興部局も参画し地区の活動を支援している。

## 3 活動の成果

### (1) 成果

#### ア 地区内、地区外の結びつきが強固になり、ビジネスへの挑戦意欲が向上！

ふれあい交流を重ねるにつれ、交流に対する地区住民の考え方が交流参加者に理解されるようになり、交流活動の意義や成果を地区住民が実感するようになった。

地区の農家の誘いに応じ、交流開催日以外にも家族連れで川遊びや野菜の収穫に訪れ、イエ同士のつきあいが始まるなど交流の輪が広がっていった。

また、何でもないありふれた生き物や自然に触れて、マチの子供達が宝物を発見したときのように喜ぶ姿を見て、渋川の素晴らしさを住民自身が再認識するようになるなど、地区住民の中にも交流の意義を理解する人が増えていった。

マチの人からは、「渋川を第 2 のふるさとにしたい。」、「来年は渋川小学校でキャンプをしたい。」との声や、地区のお年寄りからは、子供の笑い声に「久しぶりに子供の声を聞いてうれしかった。」との声が出るなど、感動を共有しあうことを通じて、双方から交流の継続を望む声が出るようになった。

一方、地区内においても、交流への取組姿勢に変化が見られるようになり、当初は「渋川をよくする会」の女性が中心となって行っていた交流会の開催準備に、「しぶかわ清流営農組合」の男性が積極的に支援するようになるなど、交流会の開催を通し

て地区内の結束が強くなっていった。

さらに、男性陣の提案により平成 20 年に初めて開催した「収穫祭」は、マチの人や他出後継ぎなど来場者が 200 人を超える盛況であったことから、男性リーダーから、交流をマチの人を楽しませるイベントにとどまらず、ビジネスへの転換を目指すべきとの声が出るようになった。



収穫祭でのサツマイモの収穫

こうした 1 年目の交流で得た成果を活かし、2 年目には交流参加者代表を加えて開催を企画し、運営の一部をマチの人が担うなど、協働による交流が実施できるようになった。

また、ビジネスへの発展に向けた取組として、地区にある宿泊施設（石船温泉）やキャンプ場（長野山緑地公園）を利用した 1 泊 2 日での交流の開催、有料体験農園など、経済効果があがるような交流メニューを設定し、実施した。

#### イ 集落点検結果に危機感が高まり、他出後継ぎに積極的にアプローチ開始！

集落点検の結果、高齢化や人口の減少が予想以上に進展していることがわかり、住民のムラの将来に対する危機意識が一層高まり、他出後継ぎへの「はがき作戦」に積極的に対応する姿勢が伺えた。

また、はがきを受けて、広島、岩国、光などから他出後継ぎ家族 20 人が帰郷し、久しぶりに帰郷した後継ぎから、地区の取組を初めて知って、渋川の将来を本気で考えたいとの声が出るなど、はがき作戦の所期の目的を達することができた。

アンケートに対し、15 人から回答があり、将来帰農の意志がある人、ふれあい交流に参加できる人がいることがわかり、住民から、地区の諸行事への参加を継続的に呼びかけることや、イエの継承について踏み込んだ話し合いをしないといけないなどの意見が出るようになった。

さらに、「渋川をよくする会」のリーダー 2 人が、率先して家族経営協定を締結した。協定は、農業経営や暮らしの方針決定のため家族会議を開催する、農繁期には帰郷して手伝うなど、他出後継ぎと親世代双方の想いを共有する内容を盛り込んだものとなった。

#### ウ 新たな渋川地区ビジョン・行動計画の樹立

ワークショップで出されたアイデアを取りまとめ、①渋川の良さを伝え、後継者が帰りたくなる地域を作ろう、②地域資源を活かして渋川のファンを作ろう、③後継者ととともに渋川らしい農林業を作っていこうとの 3 つの目標を新たに設定するとともに、目標達成に向けた行動計画を作成することができた。

#### エ 休校中の小学校を活用したむらづくり活動の拠点づくり！

ふれあい交流を契機に一気に小学校の活用の機運が高まり、むらづくり活動のシンボルとして今後も地区住民総力で継承し、コミュニティ・ビジネスの活動拠点、高齢者や住民のふれあいサロン等として活用を望む声が多く出るようになった。

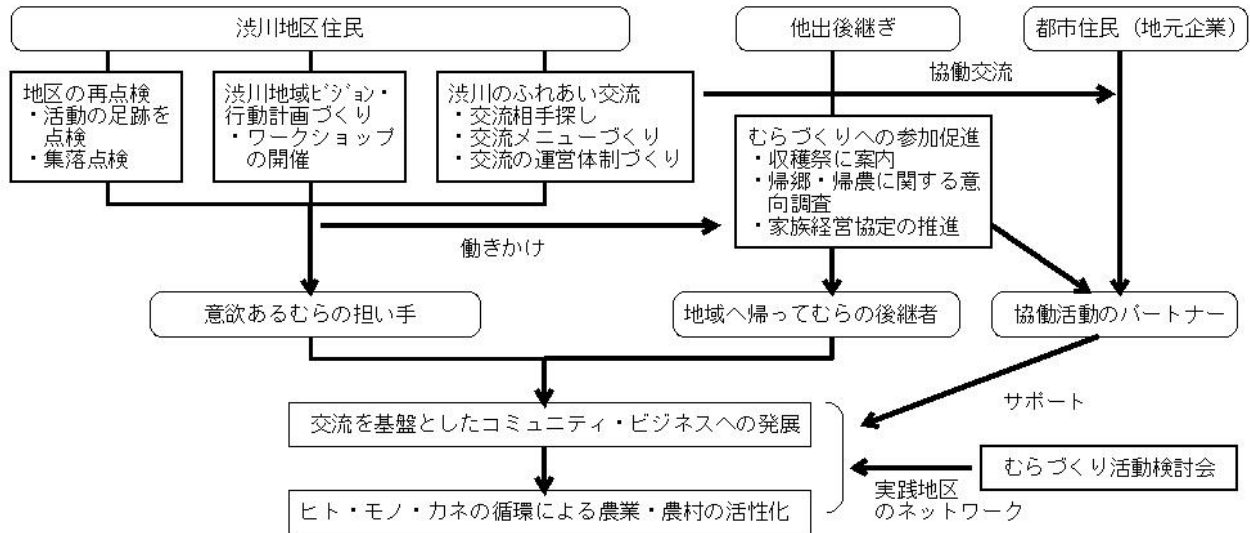
また、こうした声を受けて、会の代表を中心に市や県に対し、小学校をむらづくり活動拠点施設として整備するよう要請した。現在、地区の要望に応え、地区代表者、市、農林事務所が一体となって、整備計画を検討している。

#### オ むらづくり活動検討会で各地区のネットワークの基盤づくり

検討会の参加がきっかけとなり、小畑地区で棚田オーナー制度を導入するなど、会での情報を参考に新たな取組に挑戦する地区があった。また、交流ノウハウを教え合うなど交流実践地区の連携ネットワークの土台ができた。

以上の成果に加え、波及効果として、男性陣からは、「しぶかわ清流営農組合」を法人化し、「渋川をよくする会」と連携して生産・生活一体型のむらづくりを目指そうとの声が出るようになり、早期の法人設立を目指し、具体的な検討に着手した。

## (2) 目標達成のフローチャート



## 4 将来の方向と課題

これまでの活動経過を踏まえ、コミュニティ・ビジネスの確立に向けて、プロジェクト活動期間の平成 22 年度までに次の取組を計画的に推進する。

### (1) コミュニティ・ビジネスの担い手づくり

#### ア 「しぶかわ清流営農組合」の法人化及び多角経営の確立

体験農園の運営管理、特産農産物や加工品の原材料の生産などコミュニティ・ビジネスの実働部隊として役割発揮できるよう、法人化を支援する。

#### イ 他出後継ぎの参画促進

「渋川をよくする会」に対し、他出後継ぎへのむらづくり活動等の情報発信、世代間交流会の開催などを支援し、家族経営協定の締結を推進する。

#### ウ 「渋川をよくする会」の新たな女性リーダーの育成

むらづくり活動をリードする女性リーダーを育成するため、若手女性に交流企画づくりや運営などの実践活動を通じてリーダーの資質向上を図る。

### (2) コミュニティ・ビジネスの拠点づくり

平成 22 年度中に渋川小学校をむらづくり活動拠点として活用できるよう、これまでに地区代表や市とともに検討した構想案をもとに、整備内容、運営体制等を決定するとともに、条件整備事業の導入により構想の具現化を支援する。

### (3) コミュニティ・ビジネスの支援体制づくり

#### ア 都市住民との結びつき強化

交流活動を通じて、渋川の農業・農村の理解を深め、むらづくり活動のサポーターとして、協働活動への参加、地域特産の購入者となるよう誘導する。

#### イ 交流実践地区との連携ネットワークの構築

むらづくり活動検討会を通じて交流実践地区のネットワークを構築し、都市住民への情報発信、行政への支援の要請、むらづくり活動のノウハウの共有等に取り組み、地区住民主体のむらづくり活動となるよう外部支援体制を整備する。